第３学年１組　英語科

生き方について共に考える授業実践

―Unit6　Striving for a Better World と BLM 運動―

森阪　美文

今年度の英語科の目標は「主体的に英語で自分の考えや気持ちを伝え合う生徒の育成」である。本単元では、ミャンマーの民主活動家アウンサンスーチー女史の話を扱う。最初に、グループでノーベル平和賞受賞者らについて班で調べ英語で発表し、次にミャンマー国民のために生きることを選んだスーチー女史の生き方や、大坂なおみ選手の BLM 運動への関わりについて考えた。様々な国、年齢、立場の人々の生き方を考える過程において、間違いを必要以上に気にせず、自由に意見を交換し深め合うことができたと思う。この後、単元で学んだことを生かしながら、自分の生き方について考えをまとめ話し合わせたい。

１．学びの実際

(1) 写真の人達を英語で紹介しよう（第１・２時）

Unit6 の Starting Out はベーカー先生がアメリカで買った本を紹介するところから始まる。教科書のページにはアウンサンスーチー女史を含めた５人の写真が載っている。名前も、何をした人なのかも書かれていない。

教師：写真の人たちの共通点は何？

生徒Ａ：全員ノーベル賞を取った人。

生徒Ｂ：全員外国人。

生徒Ｃ：みんな若くない。

（Unit6 Activity「尊敬する人物」のページに写真を見つけて）

生徒Ｄ：ここには日本人もいる。

教師：確かに。ここにはいないけど、若い日本人で、今年、人権運動でがんばっているスポーツ選手知ってる？

（反応がないので、テニス部の生徒数名を指名する）

教師：みんな何部やったっけ？

生徒Ｅ：あっ、わかった。大坂なおみや。

そこで、この Unit では教科書に写真が紹介されている人物に加え、最近話題になった大坂なおみ選手についても授業で考えていこうと伝えた。写真の人物は生徒が調べて発表し、大坂選手については ALT のアリソン先生と一緒に考えていくことを付け足す。調べる人物については、重ならないよう班同士で話し合い６人をどの班が発表するかを決定した。

第１時の後半と第２時前半で発表原稿づくり、第２時後半で発表用ポスターづくりを行った。レポート作成が開始してしばらく経っても、i-pad で調べた説明のどの部分を使ってまとめてよいかわからない班がほとんだった。

教師：ワンガリ・マータイなら、どんなキーワードがある？

生徒Ｃ：グリーンベルト運動は？

教師　：おっ、いいキーワードやね。じゃ、グリーンベルト運動はどんな運動？

生徒Ｅ：木を植える運動。

教師　：誰がどれくらい？どんな風に？

生徒Ｅ：…

教師　：そこを詳しく調べて発表できるといいのー。

まずはキーワードを見つけ、どれを深めるかを考えるとよいことを全体に伝えた。

山中伸弥氏の班では ips 細胞を使えばよいのかはわかるが、その説明をどうするかで悩んでいた。

生徒：ips 細胞のことどうやって書けばいいかわからん。

教師：ips 細胞が何に役立つか簡単な英語で言えんか？

結局 ips 細胞の部分は私とともに考えたが、それ以外は自分達だけで内容を工夫した。山中氏の苦いエピソードや ips 細胞を開発するに至ったきっかけについて、習った表現を用いて彼らなりの説明を試みたのである。

He started as a medical intern in 1987. He was happy at first, but he was called “Jamanaka” by his instructor. When he saw patients who pained as sickness, he thought, “I want to help before I die.” Finally, he developed ips cells. I want to help people like him.

また、マザー・テレサの班は、彼女の残した言葉を具体的に紹介し、最後に自分たちの感想を述べた。

This is Mother Teresa. She was born in 1910. She is from Skopje. She worked for poor people. She is a nun who left a lot of quotes. For example, "Let us always meet each other with smile, for the smile is the beginning of love. "Kind words can be short and easy to speak, but their echoes are truly endless." We think we want to be like her.

オードリー・ヘップバーンの班は、ユニセフ親善大使としての活動をどう表現するか悩んでいるところで授業が終わってしまった。「できた範囲で発表すればいいよ」と声かけした。ところが、次の発表授業の前にB子が「先生、続きの部分書いたんです」と言って完成した文章を見せてくれた。最後の（　　）の部分が後で付け足した文章である。

This is Audrey Hepburn. Do you know her? She starred the movie of "Roman Holiday." ― 省略 ― So, she won many prizes such as Academy Awards, Golden Glove Award. Then she became a famous actress around the world. She also became the UNICEF Goodwill Ambassador because she was helped by UNICEF staffs. After that she visited developing countries and (tried to help many children there.)

「helped とせず tried to help としたのがいいね」と伝えたらB子はにっこりほほえんだ。発展途上国で子ども達を必死で助けようとするヘップバーンの姿がどうしたら伝わるか彼女なりに考えたのだろう。

(2) 発表内容を振り返る（第３時）

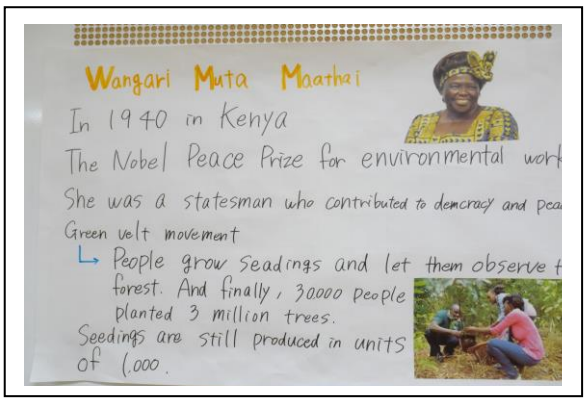
ポスターを用いて発表を行った後、他の班の発表原稿を見て、互いの発表を振り返った。具体的にはよい表現とその理由、内容をさらによくするためにどう直したらよいかを英語で言った。そして、１相手の発表内容をより深く理解し、２英語の文章についての意見を英語でやり取りすることで、英語を使う必然性に気づき、３互いの語彙や表現方法を学び合って表現の幅を広げる、ことができたと思う。

アドバイスは班の番号順で行った。例えば、１班の発表に対し、２班、３班、４班…の順でアドバイスした。班員が全員交代でアドバイスを行った。

生徒Ａ：（マザー・テレサの班に対して）We think that 「We think we want to be like her.」 is a good sentence because you can say your opinion in the end.

生徒Ｃ：We can imagine her life through her quotes, but If you also talk about what she did for people, your report will become better.

生徒Ｄ：（ワンガリ・マータイの班に対して） We can understand easily why she won the Nobel Prize from 「In 2004, she won the Nobel Peace Prize for environmental work.」



［ ワンガリ・マータイの発表ポスター ］

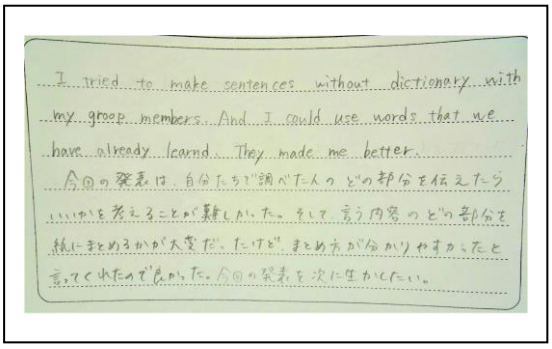
生徒Ｅ：（山中伸弥の班に対して）We want to know why Mr.Yamanaka was called Jamanaka.

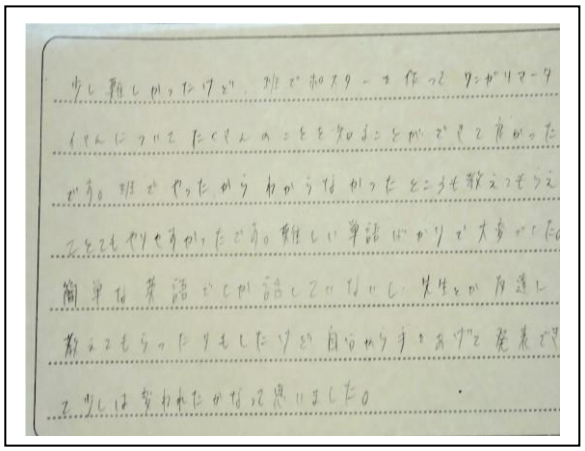
生徒Ｆ：（オードリー・ヘップバーンの班に対して）We think that 「such as Academy Awards, Golden Glove Award.」 is good because we can understand she is a great actress from it, but we want to know more about her work as UNICEF Ambassador.

途中困ったことが起きた。それは、アドバイスしたい内容を、最初の班が言ってしまい、後の方の班の生徒は「～班に賛成です」と言った後に同じ意見を繰り返すだけで言うことがなくなってしまったのである。生徒の表情にも物足りなさが感じられた。そこで急遽、挙手発表に切り替えることにした。すると、それまで後の発表順だった班の生徒は真っ先に手を挙げ、次々と挙手が続いた。

最初、私は英語でのアドバイスは生徒達には難しいと考えていた。そして、自分の番がわかっている

と少しは安心して発表できるから順番を決めておこうと思ったのである。しかし、それは逆効果だった。自ら手を挙げ英語で意見を述べる生徒達の姿は実に生き生きとしていた。以下は第３時の最後に書いた生徒感想の一部である。


I tried to make sentences without dictionary with my group members. And I could use words that we have already learnd. They made me better.
今回の発表は、自分たちで調べた人のどの部分を伝えたらいいかを考えることが難しかった。そして、言う内容のどの部分を核にまとめるかが大変だった。だけど、まとめ方が分かりやすかったと言ってくれたので良かった。今回の発表を次に生かしたい。


少し難しかったけど、班でポスターを作って、ケンガリマーケットについてたくさんのことを知ることができて良かったです。班でやったからわからなかったところも教えてもらえてとてもやりやすかったです。難しい単語ばかりで大変でした。簡単な英語でしか話してなかし、先生とか友達に教えてもらったりもしたけど自分からすすんで発表でき少しは変われたかなって思いました。

(2)ALT と共に考える（第４時）

まず、１週間前に、アリソン先生と私で授業について簡単な打ち合わせを行った。最初、私はBLM 運動について大坂なおみ選手へのインタビューを使ってほしい、大坂選手の考えや目標に対してどう思うかを、Do you think a discussion is better than being loud?（声高に発信するより話し合いの方がよいと思うか）What goals have you set for yourself?（あなたはどんな目標を定めているのか）のような質問を使って生徒達に考えさせたいと自分の考えを述べた。しばらく考えた後、アリソン先生は別の方法を提案してくれた。生徒が ALT と共に考えるためには ALT 自身が納得しなくてはいけないと思ったので、その方法で授業を行うことに決まった。具体的には、全ての班がワークシートに意見を書き込み次の班に回し、次の班が意見を書き込む方法を取った。そのことで、互いの考えがよくわかり、考えがより深まっていくと考えたのである。

当日は、まず最初アリソン先生がプレゼンテーションソフトで動画や写真、風刺画等を用いて問題提起を行った。その後、１枚ずつ異なった質問が書かれている６枚のワークシートに、制限時間内に自分の班の場所に考えを書き、時間が来たら次の班に回すというのを５回繰り返した。全ての質問と⑥の質問に対する各班(G1～G5)の意見を紹介する。

＜ワークシート質問＞

① Who is a Japanese person?
② Who is a foreigner?
③ At the supermarket, who did you choose? Why?
④ Is BLM important in Japan?
⑤ Naomi Osaka thinks BLM is good. Why?
⑥ What do you think of the police?

＜⑥のワークシートに書かれた各班の意見＞

「 What do you think of the police? 」

G6: Japanese police is good but American police is not good because they often kill black people.
G1: American police is not good but they are strong.
G2: American police is not good. They are dangerous because they kill black people. We can't understand them.
G3: Japanese police is good. We don't think foreign people have human mind.
G4: They look strong but a little scary because they have guns.
G5: Police must be fair to everyone. They mustn't kill a person recklessly.

最初の方の班は、日本の警官はよい、アメリカの警官は黒人を殺すからよくない、危険、理解できないと言う意見だったが、G2 ではアメリカの警官は人間味がない、G4 では銃を持っているから強いけれど怖い、G5 では警官はすべての人に公平でなければならないし、何も考えずに人を殺してはいけない、と警官のあるべき姿を考えるようになっている。

[スーパーで品物の場所を尋ねるのにどの人に聞くか尋ねる場面]

また質問を考えやすくするために、例えば③の質問ではプレゼンにおいて、年配の白人、中年の白人男性、中年の白人女性、髪を青色に染めタトゥーを入れている若者、年配の黒人、中年の黒人の写真を黒板に貼り、あなたならどの人に声をかけるかを予め挙手させた。そして、その理由を後で班で話し合うよう伝えたのである。

[班で質問について考える場面]

１つの質問に５分程度で意見を書かなくてはいけないので、みんな必死になって考えていた。前の班の意見を見ながら自分達の意見を考えることで、考えの違いに気づき、さらに考えが深まったようだ。次から次にやって来る質問に途中で少しめげそうになる生徒もいたが、アリソン先生が近寄り英語で補助発問をしたり表現をアドバイスをしたりすると、再び懸命に考え始めた。

難しい内容になると机にうつぶせることのあったＳ君は、この時間、日本語ではあったが自分の意見をきちんと伝え、班の仲間と共に英語でどう言うかを考えていた。また、授業の感想でも「班を変えてポスターづくりをまたやってみたい」と書いていた。全ての生徒が主人公になれる授業とは何かについて考えさせられる実践であった。

第５時、授業の最初１５分程度で、アリソン先生の授業について考えをまとめる時間を持った。第４時に全ての班が書いたものを見ながら、各自が短い英文で自分の考えをまとめた。次は大坂選手について書いた文章である。

〇I think Naomi is a very kind person. Even if my platform was just like hers, I couldn’t do like her. It’s because I’m scared of such actions. She is strong. However, I want to be fair to everyone.

〇 I think Naomi’s action is very good. She is a very good person. I think she wants to help people around the world.

２．振り返り

本単元は特に２つのことを見つめ直すきっかけとなった。１つ目は自己決定の場について、２つ目はよりよい支援についてである。

具体的には、第１時で既存の班を用いて活動を行ったが、生徒のやる気を優先するなら個人が調べたい人物を選び、同じ人物を選んだ者同士が集まって班を作るべきであった。教師の都合を優先し生徒の自己決定の場を奪っていなかったかと反省している。

また、本実践を行う前は生徒の声をきちんと拾いたいと考えていたにもかかわらず、それが十分にできていなかったように思う。生徒の声を聴くことでよりよい支援が可能となり、生徒同士の学びが深まる。規則的で偏りが最小になるよう、可能な限り全ての生徒と言葉を交わすよう心掛けながらよりよい協働学習支援を模索していきたい。

本単元はこの後３時間ある。アウンサンスーチー女史の私生活について考え、単元の学びを通して自らの生き方について英語で書き、互いの考えを付箋を用いて話し合う。ここでの振り返りが生かされるよう、早速、この３時間の授業から新たな気持ちで取り組んでいきたい。

【引用文献】

木村　優・岸野　麻衣　編　「授業研究」新曜社　2019.6.5